

自蹊庵便り

令和三年 文月

NO 151

〔茶事今昔〕

巡り田の稲穂が膨らみ始めました。

「穂含月（ほふみづき）」や短冊に歌を詠んだりして、字の上達を願った七夕の行事「文披月（ふみひろづき）」からの由来ともされておりますが、文月（ふみづき）、恵み豊かな月にごさいます。

過日は、学校の茶道部の御指導をなさっておられる先生方の前でお話しをさせて頂く機会を得ました。

長い方では三十年余もの年月御奉仕なさっているとのこと、誠に頭の下がる思いにごさいます。次世代に、そして未来に継いでいくための日本文化の耕しの尊さの伝わりくるひとときにごさいました。

常に段取りと片付、段取りと片付と、登山家がそこに山があるから山を登るが如くの感に似て、ともすれば、黙々と作業する茶事は、手間仕事、隠れ手間の多い仕事にごさいます。

未来ある若き子らが、諸先生方の御尽力

により、三年間を通して、季節の花を知り、道具だてを学び、お点前を通して楽しいお茶に出会ったその先に、ただただ気の遠くなるような作業だけの喜びのない茶事に出会わせてはならない…と常々思っておりますから、この度御縁を賜り、参加させて頂き、思いましたことは、次の世代、未来ある若者達に、楽しい茶事に合わせてあげたい…ということでした。

出会わせてあげるには、何をどのように工夫して、次に続けていくべきか、課題多きことにごさいますが、今に合った茶事、若い方々が初めての茶事に招かれたことで感動を得、その感動の積み重ねが活力となり、蓄えていく機会が多ければ自ずと力がつき、自分の身の丈にあった茶事で、「是非、お人をお招きして一服差し上げたい」という思いが芽生えることを願ってやみません。

次世代の茶の湯人が心豊かな人生を歩んでいける手立てとしての茶道との出逢いがありますように、日本の文化を心から誇り

に思い、限りなく愛してやまない若人が沢山沢山育ちますように、終始願ってやまない二日間にございました。

これからの世、デジタル化の加速、とどまるところを知らず、辿りゆく文化の矛先すら見えません。このグローバルな時代を次世代に託す手立て、何をどのように…と、一見途方に暮れそうになります。そのような只中ではありますが、徐々に未来に向けて、多くの皆様が力を注いでくださっている会に参加でき、有意義な時間に出会わせて頂きました。紙面の上ながら改めて御礼申し上げます。

私は山梨の道志村に水汲み小屋を作っております。誠に水を汲むだけのほったて小屋なのですが、二十年前まではその山で毎年、夏休みに幼稚園児から小学生達の合宿を引き受けておりました。東京の都会しか知らない子供達で、お茶を習っている子供達ばかりをお預かりしての合宿を十年近く開いておりました。

三泊四日のその合宿では、毎日リーダーが変わり、当番をリーダーが割り振り、料理担当、お茶の準備、菓子作り、掃除等々、子供達は実に活き活きと楽しんでいたことを思い出しました。

その子供達も立派に成人して結婚し、子供がいる子供達もいます。あるときは大学受験の勉強にその山小屋を借りたいと云ってきた子供達もいて、みんな頼もしく成長していきました。

入れ替わり、立ち替わりしながらも、いつも十人前後の子供達が参加していたように思います。今となつては貴重な楽しい思い出です。

その子供達とは共にすべて手作りの茶事実習の場でした。夜咄のときは行灯を手作りし、朝茶のときもいつも子供達が意見を出し合つての茶事の準備、私は子供達から相談を受けたことだけ、智慧を貸すという立場で、一切手伝つた記憶がありません。

子供達は自ら料理を作り、岩彩を使って摘んだ花の絵を描き、菓子を作り、お茶を点て、実に素晴らしい未来の茶人達がそこにはおりました。

さて、その子供達は今、どういふお茶に出

会っているのだろうか、みんな倅せな人生を歩んでいてくれるだろうか…と、走馬灯のように蘇つてまいりました。

そしてハツと思ひましたのは、私自身、あの頃と何も変わつておらず、子供達との茶事のまね事を今、大人達と共に一服を分かち合つていふという…。かつて子供達は自由闊達に意見をぶつけ合い、創意工夫に満ちた真剣な眼差しを思い浮かべながら、あの子供達の一席一席の真剣さを越えてはいない自分を知るばかりにございます。

浅薄な知識ばかりが先行し、本質を見失つてはいないだろうか…と、道志川を流れる水音、京都八瀬を流れる高野川の水音、七月の水音、心に染みまします。

いづこより流れ来たるもの
帰するところ大海なりと
人は云ふなり

鶴女

○障害に遭い、
激して勢力を百倍し得るは水なり
○自ら潔くして他の汚れを洗い、
清濁併せ容れるの量あるは水なり
○洋々として大洋を充たし、発しては蒸気となり、雲となり、雨となり、霰と化し、雪と変じ、凝つては玲瓏なる鏡となり、しかもその性を失わざるは水なり

水五徳（静）

○淡々無味なれども、真味なるのは水なり
○境に従つて自在に流れ、
清濁合わせて心悠々たるものは水なり
○常に低きにつき、下地にありて、
万物を生育する物は水なり

○無事には無用に処して悔いず、有事には百益を尽くして、功に居らざるものは水なり

○大川となり大海となり、雲霧雪となり、形は万変すれども、その性失わざるものは水なり

水五訓（動）

○自ら活動して、他を動かしむるは水なり
○常に自己の進路を求めて、

編集子注

水五訓…黒田如水、水五徳…老子

止まらざるは水なり